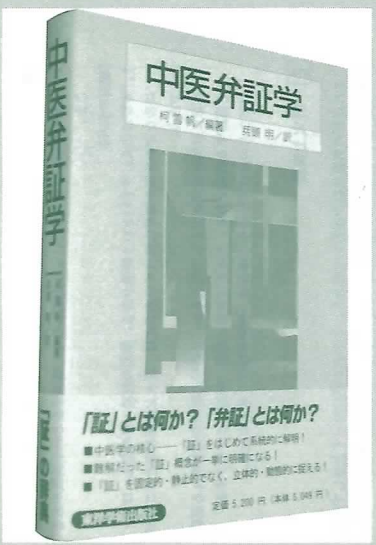
●「証」とは何か？　「弁証」とは何か？

中医弁証学

著者：柯雪帆（上海中医薬大学傷寒論教研室教授）
訳者：兵頭　明（学校法人後藤学園中医学研究室主任）
Ｂ５判 544頁　定価5,200円（本体価格5,049円）

中医学の核心「証」をはじめて系統的に解明！
一挙に明確になる「証」の概念！



中医学において，「証」「弁証」はもっとも重要な概念です。患者の病態を把握するための方法が「弁証」であり，診断の結論が「証」です。治療はこの「証」にもとづいて決定されます。そのため，中医学においては，「証は中医学の核心」といわれます。

ところで，この証という概念は，一般的には４文字の漢文でなりたっており，われわれ日本人には大変馴染みにくい概念です。読者のみなさんも苦労されてきた問題であると思います。中国においても激しく長い論争と研究が続けられてきたテーマであり，最も重要な研究課題の１つです。この研究の蓄積を整理し教材としてまとめたのが本書です。中国を代表する理論家であり，日本にとっても親しい柯雪帆教授がこの「証」「弁証」に全面的な解明を行ないました。本書を読めば，「証」とはこのような構造でできていたのか，このように考えればよかったのか……と，曖昧だった概念が一挙に明確になる驚きを感じられることでしょう。中医学を学ぶ人々の必読の書であると思います。

●本書の内容

○緒論――弁証学の歴史と将来への展望
○総論――「症」「証」「病」との関係。証の名称の意味と由来。証の基本概念。弁証の内容（何を弁証するのか）。弁証において参考になる要素。弁証の方法。
○各論――病邪弁証・病性弁証・気血陰陽弁証・病位弁証・臓腑弁証・経絡弁証・六経弁証・衛気営血弁証・三焦弁証の12章に分け，それぞれに証候を挙げて詳論する。各証候では，主症・症状所見・証状分析・本証の進行と影響・弁証のポイント・他の証との鑑別ポイントを示す。

●本書の特徴

無数にある「証」を羅列的・平面的に解説するのでなく，相互の関係と鑑別の解説に重点を置いている。そして１つの証がどのような変化を経て別の証にどのように転化するか，という進行・趨勢を示している。ヨコ軸とタテ軸から１つの証を捉えているところに本書の特徴がある。

ご注文は　FAX専用フリーダイヤルで　今すぐにFAX 0120－727－060

〒272 千葉県市川市宮久保 3－1－5
東洋学術出版社
電　話（0473）71－8337
ＦＡＸ 0120－727－060

すばらしい本です。「証」「弁証」についてはっきりした認識をもつことができます。

本書の特徴は，実際の臨床で証を決定するときに必要とされる弁証のポイントを明確に提示していることにあります。初学者にとっても，非常にわかりやすい内容になっています。証を静止的に固定的にとらえるのではなく，時間的推移のなかで証がどのように変化していく可能性があるのか，他にどのような影響を与える可能性があるのか，証と証の関係はどのようになっているのか，類似した証の鑑別ポイントは何なのか，について明確に提示しており，立体的に証が把握できるように工夫されています。

我が国での中医学の現状は，中医学を学習した多くの人が基礎段階を越え，臨床応用の段階に入っております。そうした時だからこそ，臨床カンファレンスの出来得る共通の土壌を設定するために，この『中医弁証学』の一読を是非お勧めしたいと思います。

（訳者　兵頭　明）

2．上記の証候が情緒の変化により出現したり，消失するという特徴があること。

【鑑別ポイント】

1．本証は化火しやすいという特徴がある。顔面の紅潮・目の充血・口乾・口苦などの熱象が顕著に現れているものは，肝火上炎証と考えることができる。

2．本証には情志病変が主として現れるが，その他の情志変化が現れる証候と鑑別する必要がある。たとえば驚悸・胆怯（聴病，ビクビクする）・口苦などの症状をともなう場合は，胆鬱痰擾証と考えられる。

2　肝火上炎証

これは肝の気鬱状態が進行して化火し，この火が経に沿って上逆して起こる病証である。本証は肝の実証としてとらえることができる。症状としては，頭顔面部に熱象が現れる特徴がある。また本証は，酒・タバコ・辛い飲食物などのとりすぎによっても起こりやすい。湿熱の邪が内鬱し，それが化火した場合にも起こる。

【主症】　頭痛・目の充血・急躁（いらいら）・易怒

【症状・所見】

①頭痛・眩暈・顔面の紅潮・目の充血・脇痛・耳鳴り・口苦

②咽頭の乾き・口渇・便秘・小便黄・両脇部の疼痛(あるいは灼熱感がある)

③いらいらする・怒りっぽい・心煩・不眠・夢を多くみる・ビックリしやすい

④吐血・衄血

⑤月経の来潮が早くなる・経量が多くなる・経色は鮮紅色

⑥舌質紅・舌苔黄・脈弦数

【証状分析】

①肝火上炎し頭や目に上衝すると，頭痛・眩暈・顔面の紅潮や目の充血・脇痛が起こりやすい。肝は目に開竅するといわれている。また胆経は耳に入っているが，肝熱が胆に移ると耳鳴り・口苦などが起こる。

②火が津液を損傷すると，咽頭の乾き・口渇・便秘などが起こる。また肝火が肝経に影響すると，肝経の走行部位である両脇部に疼痛あるいは灼熱感

が起こる。

③肝の気機が失調すると，いらいらしたり怒りっぽくなる。また火が心神に影響すると，心煩・不眠・夢を多くみる・ビックリしやすくなる・癲狂などが起こる。

④火が血絡を損傷すると，吐血や衄血（じくけつ）が起こる。

⑤月経異常は，肝血がうまく蔵されなくなり，衝任が失調して起こるものである。

⑥この舌脈象は，肝の実熱証の現れである。

【本証の進行と影響】

本証は実火を特徴としている。火が盛んになると陰を損傷して肝陰虚を引き起こし，それが進行して腎陰に及ぶと肝腎陰虚証を形成する。また，このために陰が陽を制御できなくなると肝陽上亢証となる。

【弁証のポイント】

本証には多くの症状・所見が現れるが，次の弁証ポイントをしっかり把握するとよい。

1．肝気鬱結の既往歴があること。あるいはいらいらし怒りっぽくなっていること。

2．舌と脈に肝の実熱証の特徴（舌質紅・舌苔黄・脈弦数）が現れていること。

3．2項目以上の主症があること。

【鑑別ポイント】

1．本証と肝気鬱結証との鑑別

肝鬱には火旺の症状は現れないが，本証には舌質紅・舌苔黄・脈数・目の充血・小便黄・出血などの熱象が現れるという特徴がある。

2．本証と肝陽上亢との鑑別

肝陽上亢証を参照。

3　肝陰虚証

これは肝臓の陰液が不足したために，その滋養・潤潤作用が低下して起こる虚熱証である。肝病の症状と陰虚による症状が同時に現れるという特徴がある。本証は以下のような原因により起こりやすい。

［目次の一部］

緒　論

①弁証学の性質・内容・基本任務②弁証学の形成と発展 ③弁証学研究の現状と展望

総　論

第1章　症

第1節　症の命名

①古今症名の異同 ②症名の範囲 ③単一症名と複合症名 ④現代医学の症名の引用

第2節　症の分類

第3節　症と症との関係

第4節　症の発展変化

①症自身の波動起伏 ②症の起伏が病証の程度を示すもの ③症状の減退または消失が逆に証状の増悪を示すもの

第2章　証

第1節　証の基本概念

第2節　証の命名

①病邪により命名された証 ②正気の変動により命名された証 ③病変の基本性質により命名された証 ④病変の所在部位により命名された証 ⑤人体のある種の機能失調により命名された証 ⑥主治方剤名により命名された証 ⑦総合的に命名された証 ⑧特殊な症状により命名された証

第3節　証の兼挟，複合と層位

第3章　弁　証

第1節　弁証の理論基礎

第2節　弁証の内容

①病邪の性質およびその転化と兼挟の弁別 ②正気の盛衰およびその発展，正気の各部分の間の相互影響についての弁別 ③正邪闘争の状況の弁別 ④病変の所在部位の弁別

第3節　弁証の参考要素

①体質的要素 ②心理的要素 ③社会的要素 ④自然的要素

第4節　弁証の方法

①平脈弁証法 ②動態弁証法 ③症状相関弁証法 ④特徴弁証法 ⑤症状比較弁証法 ⑥時相弁証法 ⑦仮象識別弁証法 ⑧治療帰還弁証法⑨湯方弁証法 ⑩分型弁証法

第5節　弁証の綱領――八綱

各　論

第1章　病邪弁証

第1節　寒邪弁証

①寒邪在表証 ②寒邪入裏証

第2節　熱邪弁証

①表熱証 ②裏熱証 ③寒熱錯雑証 ④熱入心包証 ⑤熱極生風証

第3節　風邪弁証

①風寒証 ②風熱証 ③外中風証

第4節　湿邪弁証

①外湿証 ②内湿証 ③風湿証 ④寒湿証 ⑤湿熱証 ⑥痺証

第5節　燥邪弁証

①涼燥証 ②温燥証 ③燥湿挾雑証

第6節　暑邪弁証

①暑熱証 ②暑湿証

第7節　瘀血弁証

①寒凝血瘀証 ②瘀熱互結証

第8節　痰邪弁証

第9節　飲邪弁証

第10節　水気弁証

（以下各章は次の通り）

第2章　病性弁証

第3章　気血陰陽弁証

第4章　病位弁証

第5章　臓腑弁証

第6章　経絡弁証

第7章　六経弁証

第8章　衛気営血弁証

第9章　三焦弁証